

ノーモア・ヒバクシャ通信 第10号

発行 2013年8月17日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>

ブログ

<http://tks-forum2011.blog.ocn.ne.jp/hibakusha/>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町15プラザエフ6F

Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

残暑、お見舞い申し上げます。皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。

★もくじ

I. 第1回理事会（理事会・資料センター検討委員会合同会議）のご報告	P 1
II. 「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」実行委員会のご報告	P 2
III. 作業グループから	
(1) 資料収集	P 3
(2) 広報～継承ポータル～	P 4
(3) 映像～“だれでも上手に撮れるビデオ塾”の開催と受講生募集のご案内～	P 5
IV. 継承の取り組みの紹介(第3回)	
(1) コープみらい埼玉エリア	P 5
(2) 東京高校生平和ゼミナール連絡会	P 6
V. 追悼 山口仙二さん	P 7
VI. 2013年度会費納入のお願い	P 7

I. 第1回理事会（理事会・資料センター検討委員会合同会議）のご報告

7月13日（土）に今年度の第1回理事会が開かれました。

今回のメインテーマは「資料センター（仮称）」構想に関する報告と討議で、昨年11月に設置された資料センター検討委員会から5回の論議を経て集約された「基本構想」案についてご報告いただき、委員会との合同討議を行いました。「基本構想」案について認識の共有化が進み、原爆資料をめぐる現状とセンターの必要性などを補強することとしました。主に、「いまセンターがなぜ必要なのか、その意義について」、「いろいろな施設がある中での、このセンターの独自性について」、「センターの機能、役割について」、「センターのイメージ、建物・施設、タイムスケジュール、資金集め」などを論議しました。秋には会員のみなさんとともに、「基本構想」をめぐる論議をすすめることになるでしょう。センター構想を共有化し、設立のための条件をどう整備していくのかが大きな課題となります。

また、今理事会では、引き続き、代表理事に岩佐幹三氏、副代表理事に安齋育郎氏、中

澤正夫氏が再任されました。

II. 「“ノーモア・ヒバクシャ” を実現するために」 実行委員会のご報告

6月29日（土）午後、東京四ツ谷プラザエフ5階会議室で被爆70年に向けて、被爆体験の聞き取りを進めるため「“ノーモア・ヒバクシャ” を実現するために」 実行委員会が開催されました。

この取り組みは被爆者と受け継ぎ手の共同作業です。首都圏で実際にヒロシマ・ナガサキの継承活動に取り組んできた方たちをはじめ25名が参加、愛知と岐阜からは取り組みのレポートが寄せられました。

「はだしのゲンの伝えたいこと」（32分）を上映、受け継ぐ側から6月16日に聞き取りに取り組んだ東京高校生平和ゼミナール連絡会の姜旻宙さん、7月2日に同じく聞き取りを予定しているコープみらい埼玉県本部の越智秀克さんが報告され、東京被爆二世の会の吉田みちおさんからは全国と東京の二世の会の活動についてお話いただきました。

「私たちが被爆者からの聞き取りをして、次の世代に受け継いだり周りに知らせることはすごく意味があることだと思う。でも、それ以上に私たちが被爆者のみなさんが話してくれたことを受け継げるか、どうやって受け継いでいくか、私たちが受け継ぐことにどういう意味があるのかを自分たちでちゃんと考えて、聞き取りプロジェクトに取り組みたい」（姜旻宙さん）

「7月2日には県内8ブロックで平和活動を推進している方をお呼びして、グループワーク形式で聞き取りをして、それをそれぞれのブロックでどのように展開していくか、県内で活動している方とつないでいきたいと考えています。被爆者の方もそうですが、私の実感ではそれを語り継ぐ方も減ってきている。10年後に今のような活動が出来るのかと不安を感じています。ぜひ語り継ぐ人を増やしていく土台をつくっていききたい。」（越智秀克さん）

「去年の4月、東京の被爆者団体である東友会の呼びかけで東京の被爆二世で交流会をやりましょうということで集まりがはじまり、3回ほど交流会を経て今年4月、正式に東京被爆二世の会、通称「おりづるの子」という団体を当初会員28人、現在39人で発足させました。東友会は都庁の上の展望室でほぼ毎年、東京原爆展と銘打って写真展をやっています。結成55年の今年は今までとちょっと違うことをしようということで、「東京に生きる被爆者たち」と題し、被爆者9人の写真を撮りお話をうかがうということをやりました。写真は吉田敬三さん。（自身も被爆二世である彼は、10年前に被爆二世100人の写真を撮るという志を立て、去年新宿で写真展を開催。今年は長崎でやります。）それに私がインタビュアーについていきました。みなさんそれぞれの体験を熱心に語って下さったのですが、そこ

でみなさんがおっしゃるのが「あと何年話せるか」ということと、二世のカメラマンと聞き手が来てくれたということで非常に喜んでくださいました。これからそういうことをぜひやっていきたい。」(吉田みちおさん)

今回の実行委員会は首都圏を中心に呼びかけましたが、今後も各地での実践の積み重ねの上に、秋以降にその経験を持ち寄って、学んだことや具体的な聞き取りの方法、アイデアを交流し、さらに全国的に取り組みを広げていきます。

職場や学校や地域、みなさんの身近なところで被爆者と受け継ぎ手が語り合う場をつくりましょう。全国ほとんどの県に被爆者の会があります。最初に被爆者の会と聞き取りの目的や進め方などについて相談しましょう。お送りいただいた聞き取り票や報告・感想は2015年のNP T(核兵器不拡散条約)再検討会議に届けるなど、さまざまなステージにおいて活用し、核兵器廃絶への国際世論を高めることにも反映させられるよう活用します。被爆者の負担にならないよう交通費など配慮してください。

そのためのツールとして「聞き取り票」を用意しました。被爆者の声と受け継ぎ手の声を「聞き取り」に集約しましょう。そして記入いただいた聞き取り票の原票またはコピーと簡単な取り組みの報告・感想を継承する会事務局までお送りください。

みなさんからお送りいただいた報告や聞き取った被爆証言、被爆者と受け継ぎ手の声は継承する会の通信やwebサイトなどで紹介していきます。語り部と受け継ぎ手を結ぶためのwebサイト継承ポータルを作成中です。登録をお願いします。〔Ⅲ - (2) 参照〕

この聞き取りに興味をお持ちの方、取り組んでみたい方はノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会事務局まで。

Ⅲ. 作業グループから

(1) 資料収集～被爆者運動史資料(日本被団協所蔵)の整理はじまる～

広島・長崎の原爆から68年目の8月、5日と6日の両日、東京・港区に借りた愛宕山事務所で、被爆者運動史資料の整理作業が始まりました。

今回対象となるのは日本被団協所蔵の運動関連資料。「被団協連絡」(1957.10 創刊)に始まる「被団協ニュース」「事務局連絡」など各県組織への連絡文書をはじめ、定期総会、中央行動、国際活動の記録、被爆者援護法に関する資料など、7月12日に運び込まれた段ボール52箱分が壁一面に積まれています。

作業は両日とも朝の9時半から夕方5時過ぎまで、昭和女子大の松田忍先生(近現代日本史)の指導のもと、夏休みに入ったばかりの歴史文科学科の院生、学生のべ5人の方々の協力で進められました。

まずは、段ボールに入ったファイルに綴じられたり封筒に入れられたりしている資料を、そのまともりごとに一点、一点、封筒に入れ、資料名を記載。それを資料の種類ごとに分類

して書棚に仮置きしていきます。用意していた200枚の封筒はあっという間になくなり、慌てて数百枚も増し刷りするほどのスピードで作業はすすみます。段ボールの山が次々に崩され、別の壁面に作りつけられた書棚が封筒に入った資料で埋められていく様は感動的でした。

参加された学生さんらは、「被団協」新聞の読者アンケートや「原爆犠牲者肖像画」申込書に書かれた遺族のことばなど、とくに自筆で書かれた資料に関心をもたれた様子。1980年代、戦争の犠牲は受忍すべきだとした「基本懇意見」をのり越えようと全国各地で開かれた「国民法廷」（模擬法廷）のシナリオや報告書にも興味をひかれていたようです。

1日目には、継承する会の有原理事（映画監督）が作業風景を会のPR映像に撮るために来所、思わぬおやつの差し入れに歓声があきました。

2日間の作業で大まかに整理、分類した資料は、これから目録に録り、中性紙でつくられたもんじょ箱に収めていきます。この作業は夏休みの後半から、また続く予定です。

（2）広報 『「被爆体験継承ポータル」で、被爆者の声を未来につなぐ』

はじめまして、草野史興（くさの・ふみおき）と申します。私は現在「継承する会」の広報ボランティアとしてお手伝いさせていただいており、これまでの「通信」でも何度か触れていただいた「継承ポータル」の企画・制作を担当しております。今回はこのような機会をいただいたこと、御礼申し上げます。

まずは簡単に自己紹介させていただきます。

私は1984年、長崎市に被爆者の祖母を持つ被爆3世として生まれました。高校1年生のときに、「核兵器の廃絶と平和な世界の実現」を目的にした「高校生1万人署名活動」を仲間と共に立ち上げ、高校3年生のときには「高校生平和大使」として、国連軍縮局へ約45,000名分の署名を直接届ける役を担い、当時のローマ法王（ヨハネ・パウロ2世）とも謁見。大学生になってからは関東に拠点を置き、自分の大切なものを通じて平和を考える「I LOVE キャンペーン」を「愛・地球博」の公式プロジェクトとして実施したり、大学院の研究として「被爆体験の継承」をテーマにフィールドワークを行ってきました。社会人になってからも、オンラインの地図上に被爆体験を保存する「Nagasaki Archive」というプロジェクトに参加するなど、一貫して「被爆体験をいかに伝えるか」というテーマで行動をしてきました。

そのような私には、約13年間このテーマと向き合ってきた中で、年を重ねるごとに強くなる思いがありました。それは「自分の体験を話したいと思う被爆者の方と、被爆者の方の体験を聞きたいがどうしたらよいかわからないという受け継ぎ手の方をもっと広くつなげることはできないだろうか」ということです。被爆者の方が年々高齢化されていく中で、「被爆者」が教科書の中の存在のような「総体」になってしまう前に、1人でも多くの方同士がつながることで、「ひとりひとりの個別の体験をもった存在」として被爆者の方々が認識され、次の世代に体験と人生を伝えていくこと、それが私の抱える課題感でした。

そんな折、縁あって「ノーモア・ヒバクシャ 記憶遺産を継承する会」の皆様と出会うこ

とができ、今回の「継承ポータル」についてご提案させていただく機会をいただきました。この「継承ポータル」とは、平たく言うと、「インターネット上で被爆者の方と、受け継ぎ手の方がお互いを探し、出会うことができる仕組みを持ったウェブサイト」です。

たとえば、これまで新潟に住んでいて「被爆者の方のお話を聞きたい」という思いを持った「受け継ぎ手」がいたとします。従来であれば、彼と被爆者の方はお互いの存在を簡単に知ることができなかつたため、本来そこにあった「継承」の機会を逃してしまう結果となることがほとんどでした。しかし、「継承ポータル」があることで、主に「受け継ぎ手」が、近くに住む「体験を話したい」被爆者の方を探しだし、機会を作っていくことができるようになるのです。

このサイトの名前になっている「ポータル」とは「集まる場所」という意味を持っています。私は、このウェブサイトが「被爆者と受け継ぎ手」、「被爆者と被爆者」、「受け継ぎ手と受け継ぎ手」がそれぞれ集まり、数年後、数十年後にもつながる「被爆体験の継承」を実現するための鍵の1つとなることを願っています。

この「継承ポータル」ですが、8月中にはオープンする予定となっています。ぜひ皆様のご登録をお待ちしております。(アクセスはこちら⇒ <http://keishoportals.jp>)

草野史興(「高校生1万人署名活動」創立メンバー、「Nagasaki Archive」制作メンバー)

(3) 映像～ “だれでも上手に撮れるビデオ塾” の開催と受講生募集のご案内～

被爆者の方の聞き取りやイベントを記録するために、映像がきわめて有効であることはみなさんよくご承知のことと思います。

また、ビデオをかんたんに記録できるカメラも普及しております。

この技術を、記憶遺産の会の活動に役立てない手はありません。

もし、ご希望の方がいらっしゃったら、“だれでも上手に撮れるビデオ塾” を開催したいと思います。

受講ご希望の方が数人でも集まれば、9月から始めたいと思います。

講師は、有原誠治(理事で映画監督)。

講習会場は、四谷のプラザエフ五階の会議室、または、練馬のアニメ活動センター(有原がいる事務所)。

受講料は、一回1000円(主に会場費に当てます)。

受講条件は、ビデオを数時間撮せるカメラと、情熱をもっていること。

9月開催をめざして、受講生を募集します。

ご希望の方は、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会事務局まで。

呼びかけ人 有原誠治

IV. 継承の取り組みの紹介 ～聞き取りの感想から～

(1) コープみらい埼玉エリア(7/2 聞き取り)

埼玉県原爆被害者協議会（しらすぎ会）の皆さんの被爆証言をお聞きして、私自身とても考えさせられました。私は戦争体験のお話を何かで読んだり、テレビなどで聞くようなことはあっても、親戚や身の周りなどにひどい戦争体験をした方がなかなかいないのもあり、直接今回のようにお話を聞くのは初めてでした。今回は少人数で丸くなりみんなで会話をしているような形でお聞きしましたので、その方の生き方や考え方など表情からも訴えるものを肌で感じ、さらにお話に取り込まれました。

私は〇〇さんからお話をお聞きしました。子ども時代に被爆された〇〇さんですが、実際の戦争は終わった今でも、何十年も前の被爆体験は、自分だけでなくお子さんやお孫さんや家族への影響など、まだまだ心配が続いているというお気持ちを聞いて、まだまだ戦争は終わっていないのではないかと、私たちは本当のことを分かっていないのではないかと、表面上のことにしか目を向けていないのではないかと、自分自身にいら立ちを感じました。

そんなことから、私たちはこれから事実を学び、学んだことを私自身含め、今の戦争を知らない世代に伝えていく必要があるのだとつくづく感じました。私はこれから広島へ行く機会をいただき実際の被爆地を訪れ、学ぶ予定になっています。今回お話をお聞きして過去の事実を学び、平和のありがたさを伝える役目を担っているのだとの意識がさらに高まりました。

埼玉県原爆被害者協議会（しらすぎ会）の皆さん、今回このような機会をいただきまして、ありがとうございます。どうかこれからもお元気でお話をたくさん聞かせてください。そして微力ながら、平和のありがたさを伝えるお手伝いをさせていただけたら、うれしく思います。

コープみらい西北ブロック委員長
境 由華

（２）東京高校生平和ゼミナール連絡会

私は正直、被爆者聞き取りプロジェクトのお話を伺うまでは、原爆はもう終わった遠い昔のことに感じていました。だから私は、原爆による被爆者の方々が今も生きていて、そしてあともう数年でとても少なくなってしまうかもしれない、と聞いたとき、原爆はまだ終わった訳ではない、絶対に忘れてはいけない事件なのだやと実感として感じられました。そして、私たちが被爆者の方々の話を直接聞ける最後の世代なのだということも知り、絶対にこのプロジェクトに参加しなくてはと思いました。もし、このまま被爆者の方がいなくなってしまうたら、誰が原爆の恐ろしさを伝え、もう二度と被爆者を出さないようにするのか、私たちがその役割を担っていくしかないと思いました。それが、私が被爆者聞き取りプロジェクトに参加しようと思った理由です。

6月16日に長崎、広島の方を1人ずつ呼び出して、高校生4～5人のグループに分かれてお話をうかがいました。どちらも女性の方でしたが「いちばん心配したこと、今

まで生きてきて不安だったことはなんですか？」とお聞きしたところ「後遺症が残るような子どもを産んでしまわないかということが不安だった。結婚する時も相手の母親に出身を聞かれ、『広島です』と言ったら、エッと言われ傷ついた」と聞いて、原爆は身体的なものだけではなく、差別や不安など精神的な傷跡も残すものだと知り、改めて核兵器は恐ろしいものと感じ、核兵器だけでなく、戦争そのものをなくさなくてはならないと思いました。

被爆者のみなさんが話してくれたことをどうやって受け継いでいくか、私たちが受け継ぐことにどういう意味があるのかを自分たちでちゃんと考えて、聞き取りプロジェクトに取り組みたいと思っています。

高校2年 姜 旻宙

V. 追悼 山口仙二さん

7月6日、14歳のとき長崎で被爆し、日本の被爆者運動をその草創期から牽引してきた山口仙二さんが亡くなりました。享年82歳。日本被団協顧問。1982年、第2回国連軍縮特別総会で、被爆者代表として演説。自らのケロイドの写真を掲げながら、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォー、ノーモア・ヒバクシャ」と訴える姿は、世界中に発信され、世界の反核世論を大きく励ましました。

葬儀にあたって送られた岩佐幹三さん（当会代表理事）、池田真規さん（同副代表理事）の弔辞を同封します。

VI. 2013年度会費納入のお願い

会費の振込用紙を同封させていただきました。すでにお納めいただいているみなさまには振込用紙は入っておりません。ご送金と前後した場合はお許してください。

領収証が必要な方はご連絡下さい〔振込用紙の連絡欄にその旨ご記入を〕。領収証をお送りいたします。

よろしく願いいたします。

以上